



# 北方民族博物館だより

## No.57



H10.45 布製人形

民族名 ウイルタ

地域 北海道／網走

1997年 北川アイ子製作

ウイルタ語で人形はホホー (xoxoo) という。材質は問わず、布のものも、草のものも、紙のものも人形をそう呼ぶ。

ウイルタはサハリンの先住民族であるが、戦後北海道へ移住してきた人びとがいた。その一人、資料館ジャッカ・ドフニ館長の北川アイ子氏が作ったのがこの人形である。

平成9年に当館で開催した人形作りの講習会にあわせて、かつての記憶をよびおこしながら作成した。北川氏が子どもの頃は布が今ほど豊富に手にはいるわけではなかったといい、だから当時のものよりは少しばかりたっぷりとした体と衣装になっているかもしれない。

- 1 布製人形
- 2 企画展 アラスカ遠征のパイオニア・  
明治大学アラスカコレクション
- 3 企画展関連講演会  
極北の地ALASKA-過去／現在
- 4 INFORMATION

## 企画展

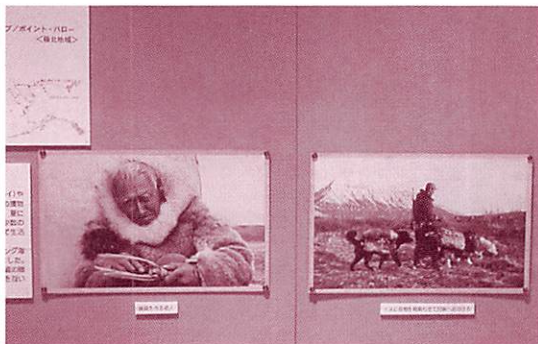
### アラスカ遠征のパイオニア・ 明治大学アラスカコレクション

2005. 2. 5 - 3. 27

考古学や民族学の分野で日本と北方地域の文化の関連性に関心が高まっていた昭和35(1960)年、創立80周年を迎えた明治大学は、記念事業として学術調査団をアラスカへ派遣しました。民族学班(班長:岡正雄氏)、考古学班(班長:杉原荘介氏)、地理学班(班長:渡辺操氏)の3班で構成された調査団は、先住民の現状とその歴史やアラスカ先史文化などの調査をおこない、貴重な民族・考古資料を日本に持ち帰りました。

平成13(2001)年、当館は明治大学政治経済学部から民族学班収集品の寄託を受けました。これらの収集品は、当時の調査状況や先住民の生活を知る上で重要なだけでなく、北方民族文化を比較検討する上でも重要な資料といえます。

本展では民族学班と考古学班が収集した資料を通じて、アラスカ研究が本格化するきっかけとなった明治大学アラスカ学術調査団「民族学班」「考古学班」の活動を中心に紹介しました。



#### 【民族学班の調査】

##### 北西海岸インディアンの調査

民族学班は、はじめに南東アラスカに北西海岸インディアンを訪ねました。トリンギットやハイダなど、さまざまな言語系統に属するこの集団は、恵まれた食料資源を基に安定した生活を送り、また洗練された芸術や複雑な社会構造を発展させてきました。

18世紀に欧米人と接触して以来、彼らの伝統的な生活は一変しました。若い世代の欧米化は、都市型生活の指向や固有言語の衰退を促しました。

民族学班は、当地でミニチュアのトーテムポールや



企画展解説会の様子

仮面などを収集し、また彼らの一部が伝統的なデザインに基づいた彫刻、仮面などの制作や言語の復活を通じて文化の復興につとめている様子を報告しています。

#### 内陸エスキモー・海岸エスキモーの調査

続いて民族学班は、極北ツンドラ地帯に内陸エスキモーと海岸エスキモーを訪ねました。

内陸エスキモーは、伝統的に獲物を求めて移動生活をしてきました。移動先で出会った集団同士は、物資の贈与や交換によって、酷寒地での生活を互いに支えあっていました。

昭和23(1948)年に内陸エスキモーの村「アナクトブック・パス」が生まれると、飛行機の定期的な往来がはじまり、食材や狩猟用ライフルなどの購入が可能となりました。民族学班が村を訪ねた当時は、まだ狩猟による自給自足が生活の中心でした。しかし民族学班は、今後益々貨幣に依存するようになると、それまでにはなかった財産所有の意識や貧富の差が生まれる可能性があるかと報告しています。

海岸エスキモーが暮らすポイント・ホープやポイント・バローは、伝統的に海獣狩猟が盛んでした。民族学班は当地で銆先や釣り針などの狩猟具・漁撈具を収集し、ポイント・ホープでは海獣狩猟中心の狩猟生活が維持されているが、ポイント・バローでは、アメリカ海軍の施設などで働く賃金労働者が増加し、狩猟者の数が激減していると報告しています。

#### 【考古学班の調査】

##### ホットスプリング遺跡の発掘

考古学班はアラスカ半島中央部のホットスプリング遺跡の発掘を通じてエスキモー文化の起源を探りました。

ホットスプリング遺跡からは、石器や土器、骨角器、炭化物が出土しており、考古学班はこれらの遺物から遺跡の年代を約3000年前と推定しました。この推定年代はもとは一つだったエスキモー文化とアリュート文化が分かれる頃にあたり、この遺跡はエスキモー文化の起源の解明に重要な意味を持つ可能性が高まりました。

### 継続された発掘調査

考古学班の調査員でもあった岡田宏明氏（当館第二代館長）は、昭和47(1972)年に新たな発掘調査団を編成し、以降も調査を継続しました。継続調査により、240以上の竪穴住居址が発見され、また貝塚の分析を通じて食生活も明らかとなりました。

### アラスカ学術調査団の成果とその後

民族学班は、伝統文化の存続と復興、急速な変容など、当時アラスカ先住民が置かれていたさまざまな状況を調査・記録しました。また考古学班とその後のホットスプリング遺跡の継続調査によって、土器や石器の形態的な類似からエスキモー文化の成立にはアジア大陸の影響があったことが明らかとなりました。

1960年に明治大学アラスカ学術調査団がおこなった先駆的な調査成果は、現在のアラスカ研究に大きく貢献しています。

なお、この調査の様子を撮影し、日本テレビが制作した番組「アラスカの顔」を上映しました。

### 謝辞

本企画展の開催にあたり、下記の機関、個人より資料・写真の貸出、および情報提供にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

明治大学政治経済学部／明治大学博物館／明治大学大学史資料センター／矢島國雄氏／山内健治氏／岡千曲氏／岡田淳子氏  
(学芸課 角達之助)

## 企画展関連講演会

### 極北の地ALASKA—過去／現在

2005. 2. 5

企画展初日には、お二人の講師をお招きし、「極北の地：ALASKA—過去／現在」と題して講演会をおこない、各地から大勢の考古学ファンが集まりました。

#### 矢島國雄氏（明治大学文学部教授）

##### 「日本人によるアラスカ考古学」



矢島國雄氏

アラスカ調査団の考古学班は、アラスカ先住民（エスキモー・アリュート・インディアン）の文化の連続性や新旧両大陸にまたがる人類の移動を探るために、アラスカ半島のツンドラ地帯に位置するホットスプリング遺跡で発掘調査をおこなった。

この大遺跡の発掘調査は、後に岡田宏明氏・岡田淳子氏に引き継がれ、この遺跡が約5000年前から600年前まで長期にわたって使用されたことが明らかとなった。

また、両氏はこの調査成果との比較のため、森林環境にある東南アラスカのヘクタ島でも発掘調査をおこなっている。当遺跡ではホットスプリング遺跡よりさらに古い約9000年前の石器が発見されている。

明治大学、岡田宏明氏へと継続されたアラスカ南部

での発掘成果は、現在のアラスカ考古学の分野で高く評価されている。

#### 山内健治氏（明治大学政治経済学部教授）

##### 「明治大学アラスカ学術調査団とその後」



山内健治氏

アラスカで民族学班が収集した資料は、長い間明治大学政治経済学部保管されていた。

実物資料や膨大な量の写真の整理を通じて、民族学班長だった岡正雄氏のエスキモーに対する関心の高さが伺えた。遠征前には体力作りをおこない、また北海道旅行を通

じて北方文化の知識を蓄えていたが、還暦を過ぎてからはじめられたこの調査に対する氏の積極的な姿勢は、我々が見習うべき姿であろう。

1960年に最初にアラスカの地を踏んで以来、数回にわたって調査を継続できたのは、氏とエスキモーの信頼関係に拠る。調査に出かけるときは常に、「学びに行く」「教えてもらいに行く」と表現した。信頼しあえる関係があったことが、その後失われゆく可能性が高かった内陸エスキモーの伝統文化の記録保存につながり、現在の我々に貴重な情報を提供してくれることになったのである。  
(学芸課 角達之助)

## INFORMATION

## ホームページリニューアル

当館ホームページが移動しました。  
新しいURLは<http://hoppohm.org>  
新しいe-mailアドレスは  
[tonakai@hoppohm.org](mailto:tonakai@hoppohm.org)です。

## 寄贈資料

- ◆金沢市の思沁夫氏からエベンキの帯ほか計3点が寄贈されました。
- ◆東京都の岡千曲氏からイヌイトの仮面ほか計23点が寄贈されました。
- ◆網走市の故寺田弘氏旧蔵のアイヌ関係資料計19点が遺族より寄贈されました。
- ◆名古屋市の光洋マテリア株式会社からイヌイト・アート計70点が寄贈されました。

## 寄贈図書

- ◆大分県の杉目昇氏から、ロシア語の文献計41点が寄贈されました。
- ◆名古屋市の森下雅代氏から日本皮革技術協会編『皮革ハンドブック』（樹芸書房）が寄贈されました。

## 資料収集評価委員会

- ◆平成16年度第3回北方民族博物館資料収集評価委員会を平成17年2月22日に開催しました。委員は津曲敏郎氏(北海道大学:座長)、岡田淳子氏(北海道東海大学)、岩崎まさみ氏(北海学園大学)、伊藤大介氏(北海道東海大学)です。



H16.70 トナカイ皮製男性用帽子

## 行事案内 2005.1-3

## ◆博物館クラブ

「イヌイト・ヨーヨーづくり」

1.10 [月]

講師 渡部 裕 (当館学芸課長)



## ◆博物館クラブ

「フェルトでつくるペットボトルホルダー」 1.15 [土]

講師 齋藤玲子 (当館学芸員)



## ◆講習会

「草木染め体験」

1.29 [土]

講師 齋藤玲子 (当館学芸員)

## ◆博物館クラブ

「イグルーで冬キャンプ! 雪の家宿泊体験」

2.26 [土]~27 [日]

講師 中田 篤 (当館学芸員)

## 博物館の出版物

- ◆研究紀要第14号を発行しました。B5判146頁

&lt;目次&gt;

ベーリング海峡の響き：両大陸を行き交う太鼓 (谷本一之)

ポスト社会主義経済下のトナカイ飼育産業：カムチャツカの現状と将来 (渡部裕)

ナーナイのフォークロア調査報告1 (齋藤君子)

トナカイ遊牧民コリャークの植物利用に関するレポート (呉人恵・齋藤玲子)

明治大学政治経済学部寄託アラスカ収集資料(1)：シシュマレフ収集資料について (角達之助)

服部健『樺太旅行記 昭和12年』附：日本学術振興会宛て報告書下書き (笹倉いる美編)

E. A. クレイノヴィチ著『ニプフのイヌ飼養と宗教観におけるその反映(2)』(中田篤・梅村博昭訳)

のりりすと2004：北方研究データベース (笹倉いる美)

ニプフ語(ボロナイスク方言) 英語語彙資料補遺・正誤一覧 (山口和彦・井筒勝信編)

## 職員の異動等

- ◆発令

主任学芸員 齋藤玲子

北方民族博物館だより  
No.57

平成17(2005)年5月18日発行  
編集・発行 北海道立北方民族博物館  
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1  
電話 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889  
e-mail : [tonakai@hoppohm.org](mailto:tonakai@hoppohm.org)  
<http://hoppohm.org>